

クリスマスの鐘

かね

アメリカの昔話



むかしむかし、
ある町に
大きな教会が
ありました。



教会^{きょうかい}には、天^{てん}にそびえる高^{たか}い塔^{とう}があつて、
りっぱな鐘^{かね}がつるされていました。



その鐘^{かね}には、『クリスマスの夜^よにだけなる』という、
ふしぎないいつたえがありました。

ところが、まだ一度^{いちど}も、

この鐘^{かね}がなる音^{おと}を聞^きいた人^{ひと}はありませんでした。

クリスマスが近づくと、

町の人たちは

塔を見あげて

話しあいます。

「今年こそは、

あの鐘のなる音が

聞かれるかなあ？」

「わしは八十年も生きているが、

まだ一度も聞いたことがない。

なんでも、わしのじいさんが

子どものころに聞いたそうだが、

それはすばらしい音色だったそうだ」

「どうすれば、あの鐘はなるのだろうか？」

「神さまにおくり物をすればなる、

という話だよ」



さて、この町のはずれの小さな村に、

ペドロという男の子と

弟がいました。



ある日、ペドロは
弟にいいました。

「クリスマスの教会って、

とってもにぎやかなんだってさ」

すると、弟は目をかがやかせて

せがみました。

「わあ、ぼくいつてみたいなあ」

「よし、つれていってあげるよ」

ペドロは、弟と約束しました。





そして、まちにまった
クリスマスのまえの夜。
ペドロと弟は、
しっかりと手をつなぐと
町へむかいました。

まち い ぐち
町の入り口までいった時、
ふたり あんな ひと
二人は女の人がおれているのを
み
見つけました。

「どうしたのかな？」

この人、動かないよ。

お兄ちゃん、どうしよう？」

「このままほうっておいたら、

こごえ死んでしまう。

こまったなあ？」

あたりには、

だれもいません。



ペドロはポケットから銀貨ぎんかを取り出すと、
弟おとうとにさし出だしました。

「この銀貨ぎんかは神さまへのおくり物ものだよ。

ぼくはこの人ひとを助たすけるから、

ひとりでいっておいで」

「えっ、ぼくひとりでいくの？

お兄ちゃんにいだって、

あんなにいきたがっていたじゃないか」

「いいんだ。さあ、いっておいで」

弟おとうとはしかたなく、

ひとりで町まちの中なかへ入はいっていきました。



教会きょうかいの中なかは、たくさんの人ひとでにぎわっていました。

どの人ひとも神さまかみへのりっぱなものおくり物を、

とくいそうにもっていきます。

キラキラとまぶしく光る宝石ひかほうせき、

山やまのような金貨きんか、立派な銀食器りっぱぎんしよくき…。

だれもがすばらしいおくり物ものをして、
鐘かねをならそうと考かんがえていました。

けれど、鐘かねはなりません。





「今年こそ、鐘をならしてみせるぞ！」

さいごに王さまも、いのちのつぎにたいせつにしている
金のかんむりをささげました。

さすがに、これで鐘かねになるだろう。

と、みんなはジッと耳みみをかたむけました。

でも、高い塔たかとうの上は、

シーンとしずまり返かえったままです。

「ああ、なんと、王おうさまの

金きんのかんむりでもだめなのか」

「きっと、あの鐘かねは永久えいきゆうに

ならない鐘かねなんだ」

「そうだ。そうにちがいない」



人びとがあきらめて帰りかけた、その時です。
とつぜん、塔から美しい鐘の音がひびいてきたではありませんか。
♪カローン、コラーン、カローン、コローン……。



「あっ！ なった、とうとうなった！」
「なんて、うつくしい音色なんだ」
「それにしても、鐘をならすほどのおくり物したのは、
いったいだれだろう？」

王さまをはじめ、人びとはいっせいにふり返りました。

そこにはペドロの弟が、

はずかしそうにたっていました。

「ぼく、お兄ちゃんからあずかった銀貨を一まい、
神さまにささげただけだよ」

弟は、そういったあと、

（お兄ちゃんの助けてあげた、あの女の方は、
きっとだいじょうぶだろうな）と、思いました。



すばらしいおくりものというのは、

高価^{こうか}だから

よいものではありません。

大^{たい}した物^{もの}ではなくとも、

おくる人^{ひと}の

心^{こころ}がこもっていれば

よいのです。

メリークリスマス





クリスマスの鐘^{かね}